
GoldenRing

たろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Golden Ring

【コード】

N0739A

【作者名】

たろう

【あらすじ】

弱気で優柔不断な主人公。そんな彼はバレエ部のエースに一目惚れ。それを幼なじみに相談したことから全ては始まった…

一目惚れ

一目惚れというやつだった。

うちの高校が出てるから、と友達に誘われて行ってみた女子バレーの大会に彼女は出ていた。

身長は160くらいと特に目立って大きいわけではないが、彼女は相手の長身の選手のブロックをもともせず次々と得点を重ねていった。

僕はその姿に目を奪われ、試合中ずっと彼女を目で追い続けた。帰り道に友達とどんな話をしたかなんて覚えてない。

嬉しいような恥ずかしいような気持ちで胸が弾けそうだった。あれから1週間。

その気持ちは消えることなく、僕の心のだ真ん中に居座ったままだ。この気持ちはいったいどうすればいいのだろう。

実はまだ僕は彼女に話しかけるどころか、彼女の名前さえもろくに知らなかった。

試合中の応援からすると、苗字はミヤモトだから宮本と書く間で間違いないだろう。でも下の名前は読み方も分からない。

「あゝもう！どうしたらいいんだよ〜」

「うっさい！いつまでもグズグズいつてないでコクするならコクる、あきらめるならさっさとあきらめればいいでしょうが！」

遙が怒鳴った。

「要するにどうにかしてキツカケを作りたんだろ、柊は^{シユウ}いつも通り、康貴^{ヤスキ}が的確に救いの手をさしのべる。

五十嵐遙と石野康貴。

小さい頃からの親友だ。

遙とは家が隣だったこともあり、生まれた時から一緒に遊んでた。気の強い女の子で、よく喧嘩もした。

先に手を出すのはいつも遙だった。

そのくせに先に泣きそうになるのも遙だった。でも絶対に涙を見せることはなくて、むしろさらに攻撃的になってこっちを泣かせるようなやつだった。

康貴は幼稚園からの付き合いで、遙との喧嘩をいつも止めに入ってきた。

でもたいていは悪化させるだけで、結局3人がもみくちやになっただけだ。

そんな二人とは幼稚園、小学校、中学校、高校とずっと同じでいつも一緒にいる。

康貴なんか、頭がいいから高校はもつといい所にいけたはずなのに、当然のように同じ高校を選んだ。

照れ臭いから誰もそのことには触れないけど、遙も本当は嬉しいと思ってるはずだ。

だから僕が2人に宮本さんのことを話したのも当然のような流れだった。

これまでも遙や康貴の恋の話は腐る程聞いたし、恥ずかしいということはなかった。

「じゃ、これからどうするか計画たてようよ。俺らも協力するからな？遙も協力するだろ？」

「ん〜、柊の“気持ち”があればね〜」

「分かったよ、昼飯おごればいいんだろ！」

運悪く今日は試験前で授業が午前で終わる日だった。

帰り道、僕らはファミレスに立ち寄って、作戦会議をすることになった。

「え〜っと、まず、柊はその宮本さんって人をどれくらい知ってるの？」

注文をすませると康貴がいきなりその話題に入った。

「どれぐらいだったって……バレー部で、高3で、キレイで、運動神

経がよくて、つてぐらいだよ」

「えー！？あんた、よくそんなんで人を好きになるわね」

「うつせーなー。好きになったもんはしょうがないだろ！」

「あ、何よその言い方！こっちがせっかく手伝ってやるうってのに！」

「だからこうして昼飯オゴって、」

「はいはいはい、二人ともやめてください。喧嘩するために来たんじゃないから。まず、遥はバレエ部の友達に宮本さんのこと聞いてみてくれないかな。話はそれからだな」

遥は何人かの所に電話をかけ、いろいろな情報を手に入れてくれた。フルネームは宮本美貴子。

バレエ部では副キャプテンをやっていて、人望が厚く、彼女をひそかに狙う男子はウヨウヨいるらしい。

しかし、今は付き合っている男はいないみたいで、コクるなら今だ、ということなのだそうだ。

「やったじゃん、柊。お前にもチャンスがあるかもよ」
康貴が追いうちをかけた。

「そうだな。早いとこコクってみるか」

僕は完全にその気になっていた。

「でもあんた、どうやってコクるの？向こうはあんたのこと知らないわけだよ」

「そこなんだよな。接点がないんだもんな」

「作りゃいいんだよ。」

康貴は作戦を考え付いたらしかった。

「月曜に全校集会つてあるじゃん。俺らが2 - Dで、宮本さんは遥の情報によると3 - Aだろ？つまり、列が隣なんだよ。だからその時に何かすればいいんだよ」

「何かつて何だよ」

「それは……その時に考えよう。つてことで今日は解散！」

「解散つて……おい！」

2人は僕を残して帰ってしまった。

僕には3人分の支払いだけが残った。日曜、僕は一日中そわそわしていた。

「何か」

で何をすればいいのかを考えると、とても落ち着いてなんかいられなかった。

しかし、幸か不幸かその心配は無駄に終わった。

なんと彼女は生徒委員だったのだ。

生徒委員は舞台の上に立って、ゴミのポイ捨ての問題だとか、校内暴力の防止だとかについての議長役をしなくてはいけない。

だから、3 - Aの列には宮本さんはいなかった。

「なあんだ、せつかく焦る柊が見れると思ったのに」

やっぱり遥はそんなことだろうと思ったよ。

人の不幸しか喜べないやつめ。と思つたら、康貴までも

「ほんとだよ。計画とかたてて損したね」

とか言い出しやがった。

「おいおい、君達、人の恋を笑いものにするもんじゃないぞ」

「だって、中2のときなんて、好きな人の前で真っ赤になっちゃつて、意味不明なこと言つて走つてっちゃったじゃない。説得力ない

よ

例によって遙が反撃する。

「違う、あれは…」

「そうそう、その後恥ずかしくて学校サボっちゃったのよね」

「てめえ、いい加減にしないと…」

「くら!!!そこ、私語はやめなさい!!!」

耳をどなり声が突き抜けた。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

周りを見ると、みんなの視線がこっちに向いていた。

くすくす笑う声もあった。

まさかと思い、舞台の方を見ると、そこにはこっちを真っ直ぐ指差す、宮本美貴子の姿があった。

幼なじみ

「終わった・・・」

教室の隅で一人つぶやいた。

遥と康貴は少し離れたところで心配そうな目でこっちを見ながら何か話している。

全校集会が終わった後の教室。

後は終礼を残すのみ、という気楽さからか、教室はいつもにも増してにぎやかだった。

「さっきの安達の怒られ方面白かったな」

なんて話す声も聞こえてくる。

でももはや怒る気力もない。

彼女と接点を持ちたいとは思ったけど、いくらなんでもこんな形でなんて・・・。

これなら接点なんかない方がよかったかもしれない。

終礼が終わわり、人波に流されるように外に出る。

心地よいはずの春の風なのに、夏の蒸し暑い風よりも不快に感じる。

僕は帰り道を急いだ。

実は20メートルほど後ろに遥と康貴が僕に話しかけるタイミングを図りながら、金魚のフンみたいにくつついてきてるのだ。

今のところは一人にしてほしいのに。

僕は黙々と歩き続けた。

しばらく歩くと大きな県道に差し掛かる。

ここで、康貴は僕たちとは逆方向に行かなくてはいけなくなる。康貴は

「頼んだよ」

と遥に言って別れていった。

ところが遥は僕に話しかけもせず、また金魚のフンになった。

僕の家が遥の家なんだからそうなるのは当然だったが。

結局最後まで話しかけることはなく、家にたどりついた。

しかし、玄関を開けても人の気配がしなかった。

テーブルの上を見ると、『五十嵐さんと買い物に行つてきます』という書き置きがあった。

どうせ買物とかいいつつ映画なんかに行つてんだろうなと思つたが、怒りの感情は湧いてこなかった。

むしろ一人になったことで、また虚しさが襲つてきた。

雨の音で目が覚めた。

いつのまにか寝てしまっていたらしい。

けっけつ強く降っている。

時計を見るとさつきから10分しか経っていないことが分かった。

どうせならもつと深い眠りにつきたかつた。

向かいの家が洗濯物を取り込む音がした。

そういえば、母さんはちゃんと洗濯物を取り込んだのかな。

いや、母さんはいないんだつた。

つてことは出っぴばなしじゃないか！僕は急いでベランダに出たが、もはや洗濯物は手遅れだつた。

こうなつたら、取り込んでみましょうがないし、放っておくか、と思つて部屋に入ろうとした時だつた。

視界の端に、小さくなつて震えてる遙が映つた。

まさかそんなはずはない、ただの見間違いだ……とは思えず、確認してみると、やっぱり遙が雨の中、膝をかかえて家の壁にもたれかかつて震えているのが見えた。

「おい、遙！何やってんだよ、そんなところで」

僕はさつきまでのことは忘れて叫んだ。

遙は顔を上げて何かをしゃべつたが、声が小さすぎると雨が激しいすぎるので聞き取れない。

しかたなく、傘をさして遙の家を訪ね、わけを聞いた。

「どうしたんだよ、こんなところで」

「家に誰もいないみたいなの」

遙にいつもの元気はなかった。

「ああ、それなら、うちの親と出かけたみたいだぜ。鍵ないならうちに来ればよかったのに」

遙を立ち上げらせながら言った。

「そんなことできないよ。悪いことしちゃったし」

「まあ、ひとまずうちに来るのが先だな」

そういつてうちに帰ると今度は電話が鳴りだした。

取ると母さんからだった。

『もし……柊？今……場なんだけ……天気悪……電車……泊ま……』

「何？聞こえないよ。おーい！」

『……嵐・電車……ないから泊ま……切れた。』

「どうしたの？」

遙が不安そうに聞いてきた。

「全然聞こえなかったんだけど、推測するに、嵐で電車が動かないからホテルかなんかに泊まってくって感じかな」

「じゃ、今日はうちには入れないってことじゃん！」

「そうなるな。どうする？泊まってくか？」

「……………そうする」

少し迷ってから答えた。

「でも柊、変なことしたらただじゃすまないからな！……………何よ？」

「いや、やっといつもの遙らしくなったなと思ってさ。とっさで夕飯どうするか。コンビニでいいか」

「料理なら私に任せなさいって。宿代の代わりってことで」

遥の料理は意外とうまかった。

そういえば遥の手料理なんて食べたことなかったな、と気付いた。

「何よその意外と美味しくてびっくりしたような顔は」

「だって実際そうなんだから仕方ないだろ」

「失礼な。これでも乙女だぞ」

僕はあやうく飲みかけのコーヒーを吹き出すところだった。

まったく、何が乙女だ。

昔から男顔負けの気の強さと口の悪さで、同級生の女子からはジャイ子なんて呼ばれてたのはどこのどいつだ。

と喉まで出かかったセリフをコーヒーで流し込んだ。

そういえばこいつのことを女として考えたのは久しぶりだった。

いつ以来だろう。

小5の時に誕生日プレゼントをあげて以来だろうか。

その年のお年玉をはたいて指輪を買ってやったら、すごい喜んで2ヶ月ぐらいずっとはめてたっけ。

確か、の女子にからかわれて着けてこなくなるまではものすごい大切にしていたと思う。

遥も覚えてるかな。

・・・そんなわけないか。

そもそもそういうのを覚えてるやつじゃないし、小学生の頃の安物の指輪なんてもう入らないだろうし。

「どうしたの？なんか遠くの方に行っちゃって」

遥の声で現実を引き戻された。遥の顔を見つめる。こうしてよく見ると・・・

「何？顔になんかついてる？あ、もしかしてかわいいか思った？」

「バカ。……痛っ！」

間髪をいれずに鉄拳が飛んできた。

やっぱり色気なんてあったもんじゃないな。どこの世界にゲーで殴る乙女がいるんだ。

「柊、頭おかしくなった？」

知らないうちににやにやしてたらしい。

時間が過ぎるのが早かった。

夕飯の後、2人でトランプをして負けた僕が皿洗いをし、風呂を覗いたただの覗いてないだので大騒ぎをし、明日のテストの勉強を一緒にし、僕の部屋のベッドを奪われてしぶしぶ親の布団に入ったときには2時を回っていた。

宮本さんのことを忘れてしまうくらい楽しかった。

やっぱり遥は幼なじみで親友という枠組がいちばんしっくりする。

幼なじみとか親友とかには性別はないんじゃないかと思う。

それは、男か女かという以前に、心のもつと根元からつながっているような気がする。

僕は眠りに落ちながらそんなことを思った。

翌朝、遥の作ってくれた朝飯を食べ、2人で学校に向かうと途中で康貴に会った。

康貴は一晩で僕が立ち直ったことに疑問をかくせないといったようすで、僕と遥が話しかけてもあいまいな答えしかかえってこなかった。

その日は一日中テストだけの日で、午前中で学校は終わった。

帰り道、僕はファミレスである考えを2人に打ち明けた。

「俺さ、明日宮本さんにコクってみようかと思うんだ」

2人の反応は面白いものだった。康貴は

「冗談だろ？」

の連発で人の話をろくに聞こうとしないし、遥は僕が言った意味をつかめず、頭の上に？マークを並べたような顔をしていた。

「だから、昨日の全校集会で顔はいやでも覚えられたはずだし、話してみればマイナスイメージも消えるんじゃないかな。コクるっていうよりは話をして俺のことを知ってもらって感じ」

「そ、そんな、なんで急に?」

「そうよ、昨日はあんなに落ち込んだのに」

「まあなんていうか、気分だな。やってみなきゃ分かんないっていうか。失敗したって俺には、」

遥と康貴がいるからすぐに立ち直れるだろうしね。と言うのは恥ずかしくてできなかった。

「とにかく、明日屋上に呼び出してやってみるよ」

「そこまで言うなら協力するしかないな」

「うん!」

今日のテストの出来をわいわい言いながら帰る生徒を、屋上のフェンス越しに見下ろしている。

自分がこれからやろうとすることの緊迫感と今見ている景色ののどかさとのギャップがもう一人の自分を作りだし、今からでもやめられるぞ、とか、ぜったいいい結果になりやしないって、とか頭の中でささやいている。

でもそれが返って僕の決心を固いものへとしてゆく。

宮本さんはまだ来ていない。

遥がうまくやってくれるはずなのに、約束の1時はとっくに過ぎてしまっている。

まったく、いつもここぞという時にへマするんだから嫌になっちゃうよ。

遠足の時は弁当忘れるわ、修学旅行では京都行きの切符はなくすわ、小さい頃から数えたらきりがない。

そのたびにこっちは弁当半分分けてやったり、駅員の前でわけを説明しなくちゃいけないのに、あいつはその苦勞を分かってるんだろ

うか。

宮本さんが現れたのは予定から30分遅れだった。おかげで遙の失敗談を思い出しすぎて、練りに練ったセリフをすっかり忘れてしまっていた。

しかも、なんと相手の方から話を始めたもんだから、僕は完全に相手のペースに巻き込まれてしまっていた。

「君、安達くんでしょ？」

「え、あ、はい」

「どうして知ってるのって思ったでしょ？実はね、あなたの国語の先生、宮本っていうでしょ。あれ、私の父なの」

確かに宮本先生はいる。

でもその可能性を考えたことはなかった。

いくら苗字が同じでも、彼女の美しさと、宮本先生の伸び放題の無精ヒゲとお世辞にもスマートとはいえない突き出た腹をつなげて考えることはできなかった。

「父が安達くんはすごい文章を書くって誉めてたの。粗削りの鉄鉾石みたいだって」

なんだそれ。磨かれてもしょせん鉄ってことか。

「それで何の用？」

「えーっと、だから、その、キレイな人だなーって思って・・・、ちよっと話ができたらいいなっていうか、なんていうか」

「要は付き合いたってことかな？」

「ん、まあそういうことです」

「いいよ」

「へっ？」

あまりに簡単にいきすぎてひょうしぬけした。

「ただしもっとお互いを知ってからね。じゃないと後々後悔するか

ら

そういつて彼女は携帯の番号とアドレスを僕に教えると、

「じゃ私は練習で忙しいから」

といつて帰ってしまった。

僕がしばらく立ち尽くしていると、遥と康貴がかけよってきた。

「やったじゃん柊。」

「なんだ、お前から見てたのか」

「じゃ、今日は告白成功祝いだね。」

遥が提案すると、

「もちろん柊のオゴリだよな」

と康貴まで言い出した。

僕もなんだか嬉しくて気が動転していたので、ついついその提案を受け入れてしまうのだった。

下り坂

次の日、部活のなかった宮本さんと一緒に帰った。

おおまかな自己紹介がすんだ後、昨日の告白の話題になった。

「なんで柊くんは屋上を選んだの？」

「いや深い意味はなくて、なんとなく屋上なら成功するような気がしただけです」

僕は緊張しながら答えた。

「ふーん。私、屋上って好きなの。だから、屋上で告白されたときにOKする気になったのかも。そういえば、私を呼び出したあの子は誰なの？最初君の彼女かと思ったけど」

「いやいや全然そんなんじゃないですよ。あいつはただの幼なじみです」

「あらそう？彼女、全校集会の時も君の隣にいたけど、君のこと見る目が違ったような気がするのよね」

「違っつてどう？」

「好きな人を見る目っていつのかしら。ま、私の憶測だから気にしないで」

まさか地球がひっくり返ったってそんなことはないだろう。

それから僕は遥のドジな話をいろいろ話したりして宮本さんを笑わせた。

家に帰ると疲れがどっと押し寄せてきた。

年上の人と話すのはこんなにも緊張するものなのか。

それでも、1週間、2週間と彼女と話すうちに、僕の心臓は落ち着

きを保てるようになったし、ますます彼女の魅力にひかれていった。きれいで、どこかの国の王妃といった印象の整った顔立ちに、肩の下まである黒いストレートの髪はよく似合っているし、イメージ通りのよく澄んだ声は僕の心になめらかに染み込んでくる。

僕は世界にひとつしかないこの芸術作品を独り占めしていることを、世界中の男どもに優越感を感じ、申し訳なくも思った。

遥と康貴とファミレスで話すのは久しぶりだった。

付き合いだしてからこの1ヶ月、僕は帰りはいつも宮本さんと一緒に帰っていた。

部活がある日でも、図書室で時間をつぶして宮本さんを待った。

しかし今日は例外である。昼休み、康貴から突然、

「遥が悩み相談したいらしいから帰りファミレスに付き合ってくれないか」

と言われた。

遥が自分から悩みをもちだすことは珍しい。

たいてい僕が康貴が遥の落ち込んだ様子を見かねて悩みを聞き出すのだ。

だからよほどのことなんだろうと僕は宮本さんに断ってファミレスに付き合うことにしたのだ。

それなのに、遥といったらなかなかその悩みを言い出さない。

僕たちが促しても、うん、とか、分かった、としか言わない。

もうファミレスに入ってからからかれこれ1時間になる。

さらに30分経ってから遥はうつむきながら話しはじめた。

「マドレーヌにき、新しいバイトの人が来たんだよね」

マドレーヌとは遥がバイトしている駅前のパン屋のことだ。

「その人が、なんとというか、まあ、その、かっこいいなーっていうかなんていうか」

そう話す遥の顔は真っ赤だった。僕と康貴は目を合わせた。

「だから、その、柊のときみたいにちょっと手を貸していただけたらなーって思ってた」

いつもの遙の強引な感じはこれっぽっちもなかった。

「俺は断る権利はないよ。最初に手伝ってもらったのは俺だし」
少しの沈黙の後、僕はそう答えた。

「ありがと。康貴は？」

康貴はテーブルを見つめたまま何も言わない。

「康貴も手伝ってやるよな？」

僕がそう言ってもなかなか首を縦に振ろうとしない。

再び沈黙が訪れようとしていた。

まったく、どうしたんだよ康貴は、と声をかけようとした時だった。

「今度は悪いけど俺抜きでやってくれよ」

康貴はそう言っただけで店を出て行ってしまった。

「私、なんか悪いこと言っただけかな」

遙はしきりにそう繰り返した。

でも僕はその理由はなんとなく分かるような気がした。

おそらく康貴は遙のことが好きだったのだ。

本人の口から聞いたことはないが、これだけ長い付き合いだと仕草や雰囲気でわかるものなのだ。

次の日から、康貴は遙のことをなんとなく避けるようになった。

あからさまに無視をするわけではないが、自分からは絶対話しかけないし、最後の授業が終わるとすぐ帰ってしまう。

遙は自分に責任があるんだと思いこみ、ひとりで悩み込む時間が増えていった。

そんな遙を励まそうと、僕はなるべく遙と一緒にいてやった。

そうすると必然的に宮本さんと一緒にいる時間は減っていった。

それまでは安定していた道を転がっていたものが、何かをきっかけに下り坂に迷いこみ、知らないうちに手をつけれないスピードになり、今まで登ってきた山のふもとまで落っこちてしまうような感じだった。

それがはっきりと見えたのが夏休みに入る前の期末試験だった。うちの学校では成績優秀者は学校新聞で名前が出される仕組みにな

つていて、いつもなら康貴が学年トップ争いをし、僕と遙は名前が載るベスト30に入れるかの争いをするはずだった。

今朝も張り出された学校新聞を遙と見に行った。

しかしそこには早くもひとだかりができていて、女子の中でも背の小さい遙は見る事ができない。

僕はそれほど大きいわけではないが、背伸びをすればなんとか見えなくもなかった。

「えーっと、俺は29位だな」

「私は？私は？」

「んー、見えな・・・げっ！24位だ！」

「ほんと？やったー、自己新記録！」

どうやら遙の元気も出てきたみたいで、元通りになれるかな、と思っただのはつかの間だった。

「じゃ、康貴は？今回は学年トップとれてる？」

遙はあれから3週間たっても自分を避け続けている康貴のことを気にしてるらしかった。

「いや、ダメだったみたいだな、トップ3にもいない」

遙の顔が曇る。

「トップ10にもいないみたいだな」

「やっぱり私のせいかな」

「あれ？おかしいな、トップ30にもいない・・・」

「んなわけないじゃない。ちゃんと見なさいよ」

何度も見た。

それでもやっぱりいなかった。

前にいたひとだけだかりが消えてから、遙も自分の目で確認したようだった。

「きつと先生のミスでしょ」

遙はわざと明るく言った。

「さ、教室行こ」

教室は康貴がトップ30落ちした、という話題で騒がしかった。

康貴がまだ来てないのをいいことに、いろいろな噂が飛び交った。

その日康貴は学校に来なかった。

夏休みに入つてすぐ、遙は新しいバイトの人に告白した。

久瀬幸弘という人で、僕らより2つ年上で、ルックスはというと、

これはもう申し分ないくらいかっこよくて、言うこともずいぶんときげな人だった。

彼は遙の告白を聞くと、すんなり受け入れてくれた。

遙はそれから毎日のように彼とどこかにでかけては、うれしそうに思い出を僕に語った。

その時の遙の顔は幸せに満ちていて、なんだか可愛かった。

恋をすると可愛くなるってのは本当だったのか。

また、なぜか分からないが、久瀬氏に対して悔しさも感じた。

一方、それとは対象的に宮本さんは部活が忙しらしく、僕は一人で取り残された気分だった。

康貴から電話がかかってきたのは8月も半ばに差し掛かった頃だった。

遙とお前にあやまりたい、という内容で、僕は仲直りできるという期待を胸に抱いて遙を誘い康貴の家に行ったのだった。

康貴の家は寿司屋をやっている。

昔よくタダで食べさせてもらったな、なんてことを遙と話しながら康貴の家に向かった。

僕は仲直りできることを信じて疑わなかった。

「ごめん。俺のせいで迷惑かけちゃって」

康貴の部屋で顔を合わせたたん、康貴はそう言った。

「ごめんな、遙。俺さ、お前のことが前から好きだったんだ。だからお前の告白の手伝いは気が進まなかったんだ。」

「え、いや、こっちこそなんていうか無神経で」

遙はいきなりの展開に慌てている。

「いいよいいよ。でも今日話したいのはこのことじゃないんだ」

康貴はきっぱりと口にした。

「俺、寿司屋継ごうと思って」

「え？」

僕と遙は意味が理解できなかった。

「そういうわけで、明日から修行に出ちやうからさ、今日謝っと」

うと思ったってわけ」

聞きたいことが沢山あった。

遥のことはいつから？修行ってどんな？いつ戻ってくる？3学期は？でもどれも実際に口には出てこなかった。

そのうちに康貴は

「じゃ俺、荷物の用意とかあるから。帰ってきたら一番最初の客はお前らに頼むぞ」

と言って部屋を出ていった。

僕たちは帰り道、何もしゃべらなかつた。

別れ際、遥に

「元気出せよ」

と言ってみただけど、返事は返ってこなかつた。

宝物

夏休みももう終わろうかという頃、町内会の温泉ツアーというのが開かれることになった。

伊豆の方へ2泊3日で行くらしいのだが、話によると、これを楽しみにしてるのはおじさんおばさんだけで、若い人は欠席ばかりなのだそう。

僕も温泉なんかには興味はなく、当然欠席することにした。

親は僕が心配だとか言っただけで、僕が、久しぶりに夫婦水入らずで楽しんできなよ、と言うと、そんな孝行息子なら心配はいらないと言って出席することにした。

ただし、僕は孝行息子なんかではなく、ただ家が独り占めできるからそう言っただけだった。

遥も欠席するみたいで、久瀬さんと呼ばうかしら、と心を踊らせていた。

僕は、また久瀬氏か、と思いながらも、僕も宮本さんと呼ばうかな、なんて考えたりした。

「いつてきまーす」

僕は布団の中で親の呑気な声を聞いていた。

一人きりになれるというのに心は晴れない。

それもそのはず、昨日の夕方、宮本さんと呼ばうと思って机の片付けをしていた僕はとんでもないものを見つけてしまったのだ。

確か、夏休みの始めに、見るのも嫌だと思って僕はそれをカバンの中にしまった。

しかし、夏休み中は宮本さんと康貴のことで慌ただしく、逆にすっかり忘れるという事態を招いた。

僕は慌てて遥に電話をかけた。

遥がやっていけば、いくらか手間ははぶけるはずだった。

しかし、遥の返事は、期待外れであり、また予想通りのものだった。

「私は柊がやってると思って…」

こんなわけで、今日は宿題を、それもまったく手をつけていない状態から、やらなくてはいけないのだった。

8時すぎに遥がうちにきて、鬨いの火蓋は切って落とされた。

こんなもの二人がかりでやればなんとかなると思っていたが、それは大きな間違いだった。

英語の物語の和訳が1冊分、国語の夏目漱石の感想文が1冊、数学のこれまでの復習が100問。

それぞれが2、3日かかる気の遠くなるような量だった。

とりあえず国語の得意な遥が夏目漱石を、特に得意科目がない僕が英語をやることになった。

途中、昼飯をコンビニで買ってきて食べ、僕らはひたすら勉強し続けた。

でも集中力とは持続しないもので、ふとした瞬間にどこかに意識がいつてしまう。

僕の場合、それは遥だった。

ついこのあいだまではただの幼なじみという風にしか見てなかったが、こうして見ると結構可愛い顔立ちをしている。

首は細くてなめらかな形で頼りないのに、しっかりと頭を支えている。

次にネックレスに目が止まった。

遥はいつもこのネックレスをしている。

その割に、いつもTシャツの中に隠すようにしまいこんでいる。

本人曰く、お守りみたいなものらしいけど。

次に目がいくのは…、やめとこう、今は勉強に集中だ。

3時を回ったところで、遥が国語を終わらせた。

その15分後、僕も英語をなんとか終わらせた。

「うー、疲れたねー」

遥が首を回しながら話しかける。

「でもまだ数学があるんだよね」

僕は腰をひねりながら答える。

「こんなとき」

「『康貴がいれば』?」

遙が言うのより先にその先を言ってやった。

「あれ?なんで分かるのよ?」

「お前の考えてることが単純だからだよ」

「た、単純って何よ!」

「それに今の、きよとんって顔は間抜けを絵に描いたみたいだしさ」
飛んできたパンチをかわしながらからかう。

「このバカ!宿題手伝ってやんないぞ!」

「手伝うって、宿題やってないのはお互い様じゃん」

「うるさい!」

実はきよとんって顔は間抜けなんて言ってるけど、ちょっと可愛いなんて思った。

そんなことは恥ずかしいから言っただけじゃないけど。

その後、10時までかかって数学を終わらせ、遙の作ってくれた夕飯を食べて布団に入ると、すごい勢いで睡魔が襲ってきた。

僕は深い眠りに落ちる瞬間、宮本さんを誘うのを忘れていたことを思い出したが、どうしようもなかった。

次の日、遙はしっかりと久瀬を家に呼んでいた。

一方、僕は朝慌てて宮本さんに電話してみたけど、用事があると断わられてしまった。

だからこうしてすることもなく、テレビの前でだらだらしてるしかないのだ。

こんななんだつたら慌てて昨日宿題をやる必要はなかったな、と思うが、やってしまったものは仕方がない。

今年は残暑が厳しくて外に出る気にはなれない。今日何度目かのため息がこぼれる。

時計を見ると11時半。

ちよつと早いけど昼飯にするか。

と思つて立ち上がった時だった。

外から怒鳴り声が聞こえた。

久瀬の声だった僕は急いで外に飛び出た。

外では久瀬がうつむく遙に何か怒鳴っていた。

「お前みたいなピーピーうるさいガキは嫌いなんだよ！」

もしや遙がまた何かやらかしたのかな、と思つて、久瀬もそんな怒ることないのに、と思ひながらなだめようとした。

が、久瀬は僕には目もくれずに遙を罵り続けている。

「ちよつといい顔すれば調子に乗りやがって！」

僕は頭にきたが、必死になだめ続けた。

が、久瀬は落ち着くどころか遙の胸ぐらを掴みあげた。

と、ここで僕の怒りは限界を超えた。

怒鳴り続ける久瀬の顔面に僕の右ストレートが入った。

冷たいものが顔に乗せられた驚きで目が覚めた。

見覚えのあるような部屋で寝かされていた。

「起きた？」

急に声が降ってきた。

声のした方に目をやると遙がいた。

そうか、ここは遙の部屋だ。どうりで見覚えがあるわけだ。

「久瀬は？」

僕が聞くと遙は一瞬悲しそうな顔をした。

「覚えてないの？ 柎、あいつにボコボコにされたのよ」

覚えてない。

「柎が最初に殴つたとこまではよかつたんだけど、あいつも頭に来

たみたいで、殴りあいが始まったんだよ」

言われても思い出せない。

「やめてって言うてもやめないから、警察呼びますよって言ったの
なるほど、正しい判断だ。」

「で、柊がやめたところをあいつは最後に思いっきり殴って逃げ
った」

「それで気絶？」

「そう。壁にガンンって頭ぶつけてのびちゃった」

そうだったのか。

「それで、俺をこんなにした原因はなんなんだよ」

僕は起き上がって、ベッドに腰掛けていた遥の横に移動した。

「ん、まあ、それは、いろいろあって……」

「あ、お前話さないつもりか!？」

「分かったよ、話せばいいんですよ」

久瀬は家にあがってしばらくはおとなしくしていたが、遥の部屋に
入ったとたん人が変わり、遥を押し倒そうとしたらしい。

「で、お前やつちやったのか」

「んなわけないでしょ」

遥が抵抗すると、久瀬は遥を思いっきり罵り、家を出ていった。

遥が追いかけると、今度は外で怒鳴り始めたという。

「そりゃ散々だったな。それにしても久瀬がそんなやつだったなん
てな」

遥の反応はない。

何かを考え込んでるようだ。

気まずい沈黙がながれる。しばらくしてから遥は突然言った。

「ねえ、私って人の心に土足で踏み込んでる？」

「え？」

「人の気持ちとか考えないで、自分の都合押し付けてる？
いつのまにか涙声になっている。」

「久瀬がそんなこと言ったのか？」

「そうだけど、あながち間違っていないんじゃないかって思う。じゃなきゃこんなこと言わないでしょ」

「・・・」

「康貴の時もそう。無神経で康貴の気持ちに気付かないで、康貴傷つけたし。私、きっと知らないうちにいろんな人傷つけてきたんだよ」

目に溜った涙が頬を伝った。

「今日も関係ない捲巻き込んでこんな怪我させちゃったし」

「関係なくない！」

僕は思わず叫んでいた。

「俺はお前の幼なじみだし、お前は俺の幼なじみだろ？お前が困ってたら助けるのは当然だよ。それともなんだ？恋人じゃなきゃ助けちゃいけないか？康貴のこともそうだ。なんでいつまでもそんなククヨ考え込んでるんだよ。康貴がそれ見たら喜ぶと思うか？康貴はお前に笑っててほしいんだよ。俺だってそうだよ。お前の笑ってる顔がそばにあれば安心するし、お前の無神経さが恋しくなることだってあるよ・・・って、」

話が大変な方向に行ってることに気が付いた。

「要は、元気だせよってことだ」

「ぶっ、何よその恥ずかしいセリフ」

遙に笑顔が戻った。

「これはお前を励まそうと思ってだな・・・」

僕は自分で分かるほど顔が赤くなっていた。

遙は笑いが止まらないといった感じた。

僕も恥ずかしさをこまかすために一緒に大笑いした。

笑いが一段落すると、遙が話しはじめた。

「柊にそう言ってもらえて安心したよ。だってさ、・・・あいつにこんなボロクソに言われてさ、・・・康貴のことも・・・あったし、・・・私、・・・柊に・・・きらわれ・・・たら・・・どうしよう・・・かと・・・思・・・った」

途中から涙が溢れでてきて、最後の方はなんていつてるのか聞き取れなかった。

「喧嘩はしても嫌いにはなんないから安心しな」

「ほんと？」

「ああ、ほんとだ」

そう言っただけだと僕の胸に顔をうずめて大泣きしはじめた。

そしてやっと分かった。

僕にとつて一番なくてはならない存在だったのは、他でもない、この遙なんだ。

遙とずっと仲良くやってこれたのは、幼なじみだからじゃなくて、

お互いに相手が必要としていたからだったんだ。

遙はそれから1時間も泣き続け、泣きやんだときには、僕のTシャツは涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。

僕は腫れた目をした遙に向かって、正式にお付き合いの申し込みをした。

遙はまた泣きだしそうな顔をしながら何度も頷いた。

そして、どちらからともなく、短いキスをした。
幼なじみから恋人になることの確認みたいなキスだった。
それから2人でいるんなことを話した。

最後に僕はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「そつえばさ、小5の時に誕生日プレゼントとかいって指輪あげたの覚えてる？」

あれさ、今どこにあるかわかる？って聞くつもりだった。

だが、その必要はどうやらいらなかったらしい。

遥は無言でネックレスを外した。

お守りだといって、いつも誰にも見せようとしないうつだ。

遥はそのネックレスについているものを僕に見せてくれた。

金の指輪だった。

指輪にネックレスが通ってあって、首にかけると指輪が胸の位置にくるようになってる。

そして、その指輪こそが僕がプレゼントしたあの指輪だった。

「中学の頃から肌身離さず持ってるのよ。感謝しなさい」

遥は勝ち誇ったようにそう言った。

でも、柊も覚えててくれたんだ、って言うのが顔で分かる。

まったく、単純なやつなんだから。

康貴へ

お元気ですか？

私は元気です。柊も元気です。

あれから5年も経ちましたね。本当にいろんなことがありました。まず、康貴が行ってしまった直後、私は久瀬さんにフラレました。その時のことを思い出すと今でも胸が痛みます。

あの当時は今とは比べ物にならないほど傷つきました。

でも、その傷をそつと撫でてくれたのが柊でした。

柊とはその時から恋人という関係になりました。

柊はその頃、ひとつ年上の人と付き合っていました。その人には私のことをすっかり話して、土下座までして謝ったそうです。

その後、大学は2人で同じ学校に進み、今は卒業論文に追われる日々です。

そういえば、お父さんに聞きました。

今度結婚するそうじゃないですか。本当におめでとう。

修行の方はどうですか？早く帰って来て、おいしいお寿司を食べさせてください。楽しみに待っています。

それではこの辺で柊に筆を渡したいとおもいます。

久しぶりだな、康貴。元気だったか？

何から書けばいいのか迷うけど、とりあえず謝っておこう。

上の文章読んだか？ひどいもんだよな。

普通、自分のこと好きだったやつに、自分の恋の話するなんて考えられないよな。

でも、遥の無神経さと単純さは5年間いくら言っても直らないんだよ。

まあ、それが魅力なのかも知れないけど。

だから、どうか怒らないで許してやってくれよ。

さて、修行の方はどんな調子だい？早く康貴のうまい寿司が食いたいな。

5年も会ってないとどんな顔になってんだらうな。

近いうちに一回顔見せに来いよ。お互いの結婚祝いもしなきゃならないしな。

じゃ、そのうちまた手紙書くよ。元気でな。

安達 柊・遥

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0739a/>

GoldenRing

2010年10月28日09時28分発行